田見合遺跡
Tamiai site - The 1st excavation report -

2002年12月
（財）浜松市文化協会
The Association for Cultural Creation, Hamamatsu City
例言
本书は静岡県浜松市市野町における、田見合（たみあい）遺跡の発掘調査（平成14年度、教文第3036号）にかかわる報告書である。

2 発掘調査は老人保険施設新築工事に先立ち実施した。発掘調査は事業者（医療法人社団 緑生会）が財団法人浜松市文化協会に委託し、浜松市博物館が調査の指導にあたった。調査にかかわる費用は全額委託者が負担した。

3 今回の調査にかかわる日程は以下の通りである。
試掘調査 2001年11月13日
本調査 2002年6月6日
整理作業 2002年7月1日～12月20日

4 試掘調査は浜松市教育委員会が実施した。この調査で出土した遺物は、別途に報告される予定である。

5 田見合遺跡の発掘調査は今回初めてである。今回の調査を1次調査とする。

6 現地調査および整理作業は、梅田晃、鈴木一有、石橋直也、井口智博（以上、浜松市博物館）、中村玲子（浜松市文化協会）、原田和子が担当した。報告書の執筆、写真撮影は鈴木が行った。

7 調査にかかわる諸記録および出土遺物は、浜松市博物館が保管している。

8 本書で示す方位は真北を示す。標高は海拔である。方位は、調査地区の測量図を2500分の1地形図に合成して求めた。標高は2500分の1地形図に表記がある道路上の値（平成9年度改、姫街道上、標高値8.9 m）を基準にした。

目次
例言
第1章 序論
1 調査経緯 ................................................................. 1
2 田見合遺跡をとりまく自然環境 ........................................ 2
第2章 調査成果
1 調査の概要 .................................................................. 4
2 調査成果 .................................................................. 6
3 まとめ .................................................................. 10
図版
報告書抄録
第1章 序論

遺跡の位置 田見合（たみあい）遺跡は、静岡県浜松市市野町に位置する（Fig.1）。市野町は天竜川が形成した沖積平野の中央に所在し、現在、主要幹線沿いに市街地化が急速に進行している。とくに、浜松市東部と総江町をつなぐ姫街道沿いには商業店舗や各種事業所が密集する傾向が強く、かつての景観が著しく変化されている。

調査経緯  豊富な採集資料の存在から、市野町に多くの遺跡が埋没していることが従来から予想されていた。しかし、町内において大規模な開発事業が実施されることが少なく、本格的な発掘調査の機会も皆無であった。田見合遺跡では1982年に大量の弥生土器出土し、弥生時代後期の大規模な集落である可能性が指摘された。しかし、遺跡は平坦な水田畑に覆われ、現況の微地形や遺物の分布状況から、遺跡の範囲を推定することは困難であった。大量の遺物が存在するものの、その詳細は明らかに不鮮明な状態が続いていた。

2001年、かつて遺物が大量に出土した地点の南部側において、老人保健施設の新築工事が計画された。開発予定地における遺跡の埋没状態は全く不明であり、浜松市教育委員会により試掘調査が実施されることになった。

試掘調査では、開発予定地に良好な状態で遺跡が保存されていることが判明し、弥生土器も比較的大量に出土した。この結果を受け、遺跡の取り扱いを巡る協議が事業者（医療法人社団 緑生会）と浜松市教育委員会の間で行われ、建物部分は盛土による遺構保存をはかること、遺構面まで掘削するオイルタンク及び放流部埋設部分の2地点に限り、事前の発掘調査を実施することが決定された。

発掘調査は2002年6月6日に実施した。調査面積は25 m²である。

Fig.1 田見合遺跡の位置
2 田見合遺跡をとりまく自然環境

沖積平野の概況 田見合遺跡は、天竜川が形成した氾濫平野上に立地する。天竜川の流路は三方原台地と磐田原台地の間において、絶え間ない変更を繰り返しており、天竜川は支流が入り乱れた幾筋もの集合体として考えるほうが実態に近い。天竜川の主要な流路は痕跡として現在の小河川に引き継がれている。市野町の東側を流れる安間川は現在でも安定した水量を保ち、かつて天竜川の主要な流路の一つであったと考えられる。

天王低地 田見合遺跡が立地する氾濫平野は、南北約3km、東西約1.5kmの範囲におよぶ。この平野の広がりは加藤芳郎によって「天王低地」と呼称され、氾濫平野としては天竜川流域で最大規模を誇る。加藤によると、天王低地の大部分は縄文時代まで水没であり、弥生時代になって泥後の堆積が進み水田として活用できるようになったという（加藤1994、篠輪遺跡報告）。田見合遺跡は天王低地の北側中央に位置しており、弥生時代後期には天王低地の開発もある程度進行していたことを裏づける。

現況から天王低地の中の微地形を復元することは困難であるが、低地の中の微高地上に集落が形成されていたと推定できる。天王低地の範囲内における遺跡の埋没状況は不明な点が多く、今後の調査にかかる期待が大きい。

Fig.2 天王低地を中心とした自然地形と遺跡の立地
Tab.1 長上地区における主な遺物出土記録および発掘調査一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>被研究</th>
<th>所在地</th>
<th>調査・出土時期</th>
<th>調査主体など</th>
<th>主な時代</th>
<th>文献</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>長上郷土研1959</td>
<td>長上郷土研究会</td>
<td>1959</td>
<td>長上郷土資料（二）安養寺遺跡について</td>
<td>長上郷土研1959</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鈴木1985</td>
<td>鈴木範子</td>
<td>1985</td>
<td>「田見合遺跡の彫出土器」で ε 剪刊号</td>
<td>鈴木1985</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>静岡県1994</td>
<td>(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所</td>
<td>1994</td>
<td>「昇輪遺跡」</td>
<td>静岡県1994</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>浜松市1997</td>
<td>(財)浜松市文化協会</td>
<td>1997</td>
<td>「天王中野遺跡2」</td>
<td>浜松市1997</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>浜松市2002a</td>
<td>(財)浜松市文化協会</td>
<td>2002a</td>
<td>「天王町村東遺跡」</td>
<td>浜松市2002a</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>浜松市2002b</td>
<td>(財)浜松市文化協会</td>
<td>2002b</td>
<td>「田見合遺跡」(本書)</td>
<td>浜松市2002b</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>浜松市2003</td>
<td>浜松市教育委員会</td>
<td>2003</td>
<td>「浜松市遺跡調査集報」(刊行予定)</td>
<td>浜松市2003</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

文献]
第2章
調査成果

1 調査の概要

(1) 試掘調査
試掘区の設定 試掘調査では、開発対象地のほぼ全面にわたり、土層推積状況を確認するための試掘坑を設定した。この調査では、現地表である水田面から50〜80cmほどの深さで弥生時代後期の遺構面が全域にわたり確認できた。遺構面が高い区域においては、試掘坑9のように、現地表から30cmほどの深さで大量の弥生土器が出土する部分も存在していた。田舎合遺跡の保存状態は全般的に極めて良好であり、埋没している遺物量も多いと予想できる。
今回報告する調査は、この試掘坑を設定した部分に重なる。本調査のA区には試掘坑１が、本調査のB区には試掘坑12が相当する。
基本層 田舎合遺跡における堆積層位をFig.4に示す。基盤層は緑灰色〜青灰色を呈する砂層（6層）である。基盤層は、浅い部分では緑灰色を呈しシルト質に近く、深い部分では青灰色を呈し、構成粒子も粗くなる。調査対象地内でも基盤層の比高差は60cm以上にあたり、比較的、起伏が激しいといえる。現在、遺跡とその周辺は平坦な水田面が広がっているが、弥生時代には複雑に高位面と低位面が交錯する地形であったと推定できる。
基盤層の上位には遺物包含層である黑色粘土（5層）が堆積している。試掘坑9では、この層から大量の弥生土器が出土している。環濠など、大型遺構の上に埋まった遺物の可能性があり、弥生時代の生活面がこの層の近くにあったと推定できる。
5層より上位には、灰色や褐色を呈する粘土層（2〜4層）が堆積している。これらの層から出土する遺物は少なく、弥生時代後期以後の自然堆積により形成されたものと考えられる。
1層は水田耕作土である。田舎合遺跡では、弥生時代後期の遺構が良好な状態で埋没しており、表面に弥生土器片が散乱するような状況は認められない。水田面の標高も、遺跡が確認される地点と遺跡が確認できない地点との差がみられず、表面の観察で地中の状態をうかがうことは非常に困難である。

(2) 本調査
調査地区の設定 本調査は、オイルタンク及び放流部埋設部分の25㎡において実施した。北西部分の調査区（オイルタンク）をA区、南東部分の調査区（放流部）をB区とする。
A区においては、幅1m、深さ60cmほどの表面V字形の溝を長さ6mにわたり検出した。溝からの出土遺物も多く、遺構の特徴から、この溝は環濠の可能性がある。
B区は、僅か5㎡ほどの小規模な調査区であるが、こちらも環濠の可能性がある大规模な溝を検出した。
Fig.4 田見合遺跡の土層堆積状況


2 調査成果

（1）A区の調査

概要 A区は20m²ほどの調査区であり、基盤層である緑灰色砂層の上面において遺構を検出した。調査区の西端で溝（SD01）が検出されたが、検出面より上位で多くの弥生土器が出土した。SD01以外には細長く浅い溝状遺構を検出した程度で、遺構の頻度は少ない。

調査時には洪水が頻発しており、数時間しか調査ができなかった。条件を整えれば、基盤層直上において柱穴などの小規模な遺構を検出できる可能性がある。

推定環境（SD01）調査区の南側において、長さ6mに及び溝を検出した。溝の幅は約1m、深さ60cmほどを測り、溝の断面はV字形を描く。遺構の特徴から、SD01は集落を囲む環濠の可能性がある。溝内の埋土は3層に分離できるが、下層においては出土遺物量が少ない。遺物の大半は、最上層（4層）からすくは包含層との区別が難しい溝上層部分から出土している。

SD01には、完形に近い土器が集中している区域が認められた。壺が3点（1～3）、高帯（24）が上下逆になって出土している。高帯（24）の袋部には、手捏ね土器（23）が入れられた状態が確認でき、これらの土器群は儀礼など、なんらかの祭祀的な意味をもって投棄された可能性が大きい。

SD01出土遺物（Fig.6-7）SD01からは比較的多量の弥生土器が出土した。Fig.6に示したもの、壺もしくは鉢である。1～3は共に遺物が集中する区域から完形に近い状態で出土した。頭部に明確な屈曲をもたない形態をなし、菊川式土器との共通性は強いといった天竜川平野の土器に広くみられる特徴をみせる。12・13といった扁状文の多用も、天竜川平野における土器様式の特徴の一つに加えることができるだろう。

Fig.7の上段（24～40）には高帯を、下段（41～47）には壺を示す。23の手捏ね成形の小型壺は、高帯（24）の袋部に入れられて出土している。

SD01から出土した遺物は、弥生時代後期前期（山中様式）の新相に位置づけることができる。
Fig.6 SD01出土遺物 (1)
Fig. 7  SD01出土遺物（2）
（2）B区の調査

概 要 B区は調査対象地の南東隅に設定したグリッド状の調査区である。上層と下層の二面において平面調査を実施し、それぞれ溝を一条づつ検出した。上層遺構は中世以降、下層遺構は弥生時代後期に相当する。

SD02（Fig.8） 上層において検出した浅い溝である。幅60cm、深さ15cmほどを測る。出土遺物はないが、検出した層位から、中世以降に掘削されたものと考えられる。

SD03（Fig.8） SD02の検査面より50cmほどの下層において、幅1.5m、深さ60cmほどの大規模な溝を検出した。SD03の断面は緩やかなV字状をなし、埋土には有機物が堆積する層位（6層）が観察できた。溝から出土した遺物は少ないが、Fig.9に示す遺物の特徴から、SD03は弥生時代後期に掘削されたものと考えられる。

同時期の溝はA区で検出したSD01のほか、試掘坑9、10、11においても検出されている（Fig.4）。試掘坑9、10、11はB調査区の北側にあたり、埋土の状態も酷似する。以上のことから、SD03と試掘坑で確認できた溝は同一の遺構である可能性が考えられる。

SD03出土遺物（Fig.9） Fig.9に示した48〜50はSD03から出土した遺物である。48・49は壷の口縁部に相当する。いずれも詳細な時期を決めるまでには至らないが、弥生時代後期の陶窯（山中様式）の新段階と捉えてよいだろう。なお、49のような幅広い条線が残る原体を使用した扇状文は、天竜川平野地域によくみられる。

Fig.8 B区検出遺構

Fig.9 SD03出土遺物
3 まとめ

田見合遺跡の詳細 今回の調査によって、田見合遺跡にかかわる詳細な遺構の埋没状況がはじめて判明した。田見合遺跡の現況は耕地整理を経て平坦な水田が広がっているが、弥生時代の地形は50cm以上の高低差がある複雑な微地形が展開していたことが明らかになった。天王低地上の微高地を居住域とし、周囲に広がる低位面を水田として利用していた集落景観が復元できる。

1982年に採集された遺物の中に弥生時代中期に測る土器が含まれるものの、出土遺物の圧倒的多数は弥生時代後期のものである。また、環濠と推定できるSD01から出土した土器などを参考にすると、田見合遺跡の本格的な集落形成の時期を、おおむね弥生時代後期前半（山中様式）の新相段階に位置づけることができる。

遺跡の広がり 今回の調査対象地には比較的良好な状態で遺構が埋没しており、1982年の遺物採集地にかけて居住域が展開していると考えられる。調査対象地の西側と南側には低位面が広がっており、水田が営まれていた可能性が高い。

Fig.10 弥生時代後期前半（山中様式期）新相段階の田見合遺跡
1 A区検出通構
2 SD01断面
3 B区検出通構
報告書抄録

書名（ふりがな）  田見合遺跡  （たみあいいせき）
著者名  秋本一有
編集機関  浜松市博物館
発行機関  財団法人 浜松市文化協会

発行年月日  2002年12月20日

<table>
<thead>
<tr>
<th>遺跡名</th>
<th>所在地</th>
<th>コード</th>
<th>北緯</th>
<th>東経</th>
<th>調査期間</th>
<th>調査面積（㎡）</th>
<th>調査原因</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>たみあいいせき  田見合遺跡</td>
<td>静岡県 浜松市市野町</td>
<td>22202</td>
<td>14-3</td>
<td>34度</td>
<td>137度</td>
<td>2002年6月6日</td>
<td>25㎡</td>
</tr>
</tbody>
</table>

所収遺跡名  種別  主な時代  主な遺構  主な遺物  特記事項 |
| 田見合遺跡 | 集落 | 弥生時代後期 | 弥生土器 | 山中様式新築の環濠集落か |

田見合遺跡
－浜松市  田見合遺跡 1次発掘調査報告書－
2002年12月20日  発行

編集機関  浜松市博物館
〒 432-8018 静岡県浜松市北区 4丁目22-1
TEL (053) 456-2208  FAX (053) 456-2275

発行機関  （財）浜松市文化協会
印刷所  中部印刷株式会社
Tamiai site
The 1^{st} excavation report

Hamamatsu Historical Museum
Shijimizuka 4-22-1 Hamamatsu City,
Shizuoka Prefecture, Japan 432-8018

December, 2002
The Association for Cultural Creation, Hamamatsu City